THE NICHD STUDY OF EARLY CHILD CARE
AND YOUTH DEVELOPMENT

保育の質と子どもの発達：アメリカ国立子ども人間発達研究所の長期追跡研究から

Findings for Children
up to Age 41/2 Yeares

日本子ども学会／編

Eunice Kennedy Shriver
NICHD
National Institute of Child Health
& Human Development

アメリカ合衆国 保健社会福祉省
国立保健研究所　(NIH)
Eunice Kennedy Shriver
国立子ども人間発達研究所 (NICHD)

U.S. DEPARTMENT OF HEALTH AND HUMAN SERVICES
National Institutes of Health
National Institutes of Child Health and Human Development

はじめに

アメリカの国立小児保健・人間発達研究所(NICHD) が、子育て、特に保育と子どもの発達との関係を明らかにするため、全米から 1300 人ほどの新生児を選んで、追跡調査を始めたのは 1993 年のことでした。2006 年の 1 月に、出生から 4 歳半までの研究成果の一般向けのまとめがアメリカ政府の出版物として出版され、このたび、お茶の水女子大学の菅原ますみ先生の翻訳により「赤ちゃんとママ社」から刊行されることになりました。心からお喜び申し上げたいと思います。

その成果がどのようなものであるかは、菅原先生の名訳をお読みくだされば直ちに理解されるでしょう。さらに、菅原先生と私の共通の友人でもあり、このプロジェクトに最初から関係していた、NICHD の元研究員である心理学者 Dr.Sara Freedman さんが「日本語版の出版に寄せて」と題して研究成果のさわりを述べておられるのも、大いに参考になります。

その上、幸いなことに、わが国の保育にとってこの本がどのような意義があるかを考えるには、菅原先生が司会をされた、わが国の保育のリーダー的存在である汐見稔幸先生（東大名誉教授、白梅大学学長）と、榊原洋一先生（お茶の水大学教授、小児科医）との 3 人の座談会「日本の〈保育の質〉を考える」も、本書には含まれています。

またそれに加えて、本書に先行して 2 歳までの研究をまとめたものが出版されていることも申し上げておきましょう。それは「21 世紀の子育てを考える、働く母親を支援するチャイルドケア――米国 NICHD の研究から学ぶ」と題して小児科診療（63,1078-1085,2000）に発表したものです。また同時に当時 NICHD の研究者として直接このプロジェクトに関係されていた Dr. Sara Freedman 先生を招いて「CRN 国際シンポジウム 2000」が開催されました。これらの報告書と今回の本を対比することも興味あることと思います。

私事にわたって恐縮ですが、このように、NICHD のこのプロジェクトにいろいろとご縁が深かったので、今回の出版は格別に嬉しく、現在までの経緯を思い出しながら、私の考えを述べて、私の言葉としたいと思います。

子どもは生物学的存在として生まれ、家庭的ならびに社会的存在として、育児・保育・教育によって育てられます。わが国では家庭技術としての育児、とりわけ母親の役割が強調され、教育は別としても、社会技術として保育の役割が正しく評価されなかった嫌いがあります。保育そのものを悪とはいわないまでも、育児の補助的なもの、さらには乳幼児にとっては、よい影響はないとさえ考えられていたように思います。

その理由はいろいろ考えられますが、明治政府の手際よい近代教育制度の確立により、家庭の育児と学校の教育とが柱となって、子どもが育てられてきたことが、第一の点でしょう。しかし、敗戦によりわが国はすべてを失い、社会基盤が崩壊したため、まずは経済の建て直しが中心となっていきました。その結果、核家族化が進み、子育てには保育が必要になりました。

それと平行して、社会は豊かになり物質的な豊かさでものが溢れるとともに、人間関係は希薄になり、人々の心もすさみ、子育てそのものにも問題が出てきました。子ども虐待はその代表に思えます。

それにもかかわらず、子どもの幸せを願う研究者も実践家も、子どもを考え愛するチャイルドケアリング・デザイン、子どもを中心にすえるチャイルドセンタード・デザインという発想を持つことができなかったのです。

ごく最近まで、アメリカでも、保育を軽視したり、問題視したりする考えはなくはなかったようです。アメリカの偉大なところは、それを解決するために、科学的に正しい追跡調査で国の研究所がプロジェクトを立ち上げたことでしょう。

このプロジェクトの存在を私が知ったのは、国立小児病院を退官し、小児科学をこえて、何か子どもたちのために役に立ちたいと考えていたころでした。たまたまノルウェーのベルゲンで、これからは、学際的、包括的に子どもを考える「子ども学」が必要であり、21 世紀の IT の進歩を考えると、世界の子どもに関心をもつ実践家や研究者をインターネットでつなぐことも必要であると話し合ったのです。幸い、ベネッセの当時の社長（現・会長）福武總一郎氏のご支援を得て、ノンプロフィットのインターネットによる学際的、包括的な子ども学研究所（Child.Reserch Net(http://www.crn.or.jp/) を 立ち上げることができました。そのリアルの場として、講演会やシンポジウムも開催しました。そのときにお招きした Brown 大学教授の Dr.LewisP.Lipsitt 教授から、この NICHD のプロジェクトの存在をうかがいました。Lipsitt 教授は、このプロジェクトの立ち上げ当時、1993 ～ 1998 年の 5 年間、運営委員長を務められた方です。当時、NICHD にいた小児科医の Dr. Sumner.Yafle さんにも連絡を取り、資料を集めました。

そんな中、Dr. Sara Freedman さんを、上述の会に初めてお招きし、菅原先生ばかりでなく、NHK の一色伸夫氏 (現・甲南女子大学教授) も加わって日米の交流の輪ができたのです。その結果が、今回の出版につながったと言えます。

もうひと言申し上げるならば、本書には NICHD がどのように計画し、どういう方法でこのプロジェクトを行ったかが書かれています。わが国でもぜひ、これを参考にして、これに負けない調査研究をしていただきたいものです。

最後になりますが、出版に当たっての「赤ちゃんとママ社」のご協力、さらには対談を加えるなど、利用者のことまで考えて製作してくださったお心遣いに御礼を申し上げ、このプロジェクトにご縁のあったひとりとして、会長の小山敦司さんにも深謝申し上げます。

平成 21 年 5 月

小林登

『NICHD 発達初期の保育と子どもの発達に関する研究』の結果から学ぶべきこと

一般的に保育（child care）という言葉は、母親が不在の間、子どもが受ける定期的なケアのことを指し，多くの場合雇用された人が担当します。多くの母親は、仕事をしたり学校へ行ったりするために、保育を利用します。また，子どものケアをしながらではすることのできない、ボランティア活動や、社会的活動などに従事するために、保育を利用する母親もいます。

産業化が進んだ多くの国において、母親の就労率はここ 30 年間で急増しています。例えばアメリカでは、就学前の子どもがいる母親の就労率は，1975 年には 39％でしたが，2000 年には 67％に増加しています。しかしながら、これらの母親の多くは、非常勤職であり、就学前児の 60％が常勤職についていない親が少なくとも一人いるという状況です。このような変化の結果、アメリカの就学前児で保育を受けている子どもたちの数は、1977 年の 430 万人から、1997 年の 1,240 万人（全子ども数の 50％以上）に達しました。このような保育の需要拡大に対して，各国の対応はさまざまでした。保育を提供することは，国家の責任であると考える国もありました。例えば，1990 年代初め，スウェーデンでは就学前児を持つ母親の 85％が働いており，子どもは高い水準の公的保育を受けていました。一方、20 世紀の英語圏の国々では，保育は私的なものと考えられており，公的資金による援助はほとんど行なわれていませんでした。このような状況の中，保育アの質やタイプには大きなばらつきがありました。例えば，1990 年代のアメリカでは，働いている母親の乳児に対する保育は，10％が施設型（Center-based）で，24％は個人による保育，乳母，ベビーシッター，28％は親戚，20％は父親という状況でした。（現在でも）アメリカの保育の多くは，親が資金を出資しており，またその質にもかなりのばらつきがみられます。その理由の一つとして，それぞれの州の保育に関する規制が顕著に異なることが挙げられます。

保育に対する需要が高まっているにも関わらず，保育に対する懸念は依然として根強く残っています。子どもと母親の間に形成される，親密で温かい関係性は，安心感の源としての子どもから母親への信頼感や，母親が子どもの欲求を敏感に感じ取る心によって作られていきます。毎日，定期的に乳児と母親が分離するという状況によって，このような関係性を形成する機会が少なくなってしまっているのではないか，という議論があります。また一方で，家族というものは子どもの社会性の発達に重要な役割を果たしています。子どもが保育を受けていると，家族の役割が損なわれてしまうのではないか，あるいは，少なくとも家族の役割が本来のものとは異なってしまうのではないか，さらにこのことは，子どもの発達にあまり好ましくない結果をもたらすのではないか，という不安も人々の中にはあります。さらに，社会的・情緒的発達と認知的・言語的発達は相互に関連しているので，保育を長時間受けていることによって引き起こされると予想される親子関係のゆがみは，認知発達にマイナスの影響を与えるのではないか，心配する人もいます。1980 年代後半，このような問題を検証しようとする研究が数多く行なわれましたが，一貫した結果を得るには至りませんでした。上記のような懸念を支持する研究結果もありましたし，異議を唱える研究結果もありました。そして，どの研究にも科学的な研究として十分な条件を備えたものではなく、それぞれに制約がありました。

『NICHD 発達初期の保育と子どもの発達に関する研究』は，乳児期に保育を経験した子どもたちの発達に関する研究としては，現時点で最大規模のものです。全米各地の 1,000 人以上の子どもたちの成長過程を追いかけています。この研究がスタートした 1991 年当時は，これまでの研究の制約を乗り越えて，より明確な結論を出せるような高度かつ大規模な研究の必要性が叫ばれていました。

NICHD の研究は，保育と子どもの発達に関するこれまでの考えに一石を投じるような，興味深い事柄を明らかにしてきました。保育を受けていた子どもたちは，集団としてみると，母親からのケアだけをうけていた子どもたちのパフォーマンスレベルとなんら変わるところはありませんでした。また，保育の質が高ければ高いほど，認知発達や社会性の発達でより良い結果を残すことがわかりました。一方で，保育を受ける時間が長いほど，ケアをする人が報告する子どもの問題行動が多いことも明らかになりました。しかしながら予想に反して，このような傾向は顕著というわけではなく，特に問題行動に関しては同じ年齢の子どもたちの正常範囲内でした。こうした子どもたちの発達初期の結果については，4 歳半以降も同じ傾向が継続しています。全体としてこれらの結果は，保育と子どもの発達との間のかなり強いネガティブな関係性に関する懸念は，統計的に保証されるものではないことを示唆しています。さらに，保育の特徴と子どもの発達との関係は，子どもの年齢や性別，人種や社会経済的状況によっても異なる場合があることが，詳細な分析によって明らかにされました。

保育に関する深刻な懸念は根拠のないものであることが示された今，保育の良さを最大限に活かし，リスクを最小限に抑えるプログラムを創り上げる良い機会がめぐってきたといえるでしょう。そのようなプログラムは，子どもたちの情緒的，社会的，そして認知的発達を支えるような，子どもの年齢に合った活動と休養の双方を取り入れたものになるでしょう。保育は社会的に創造されるものであることを，私たちは忘れてはなりません。そして保育は，子どもを育てる責任を担っている家族を助けるためのものです。保育は，家族と同じように，私たちの社会的価値観を映し出しながら，子どもの最適な発達を促進する環境を提供するようにかたち作っていくことが可能なのです。

Sarah L. Friedman, Ph.D.
Associate Director,
Health Research & Policy

Institute for Public Research
CNA
Alexandria, Virginia, USA

This Foreword is based on Friedman, S.L., Melhuish, E., & Hill, C. (in press). Child care research at the dawn of a new millennium: An Update. In Gavin Bremner and Theodore Wachs (Eds.) Wiley-Blackwell Handbook of Infant Development, second edition. Oxford: Wiley-Blackwell.

THE NICHD STUDY OF EARLY CHILD CARE AND YOUTH DEVELOPMENT

保育の質と子どもの発達
：アメリカ国立
子ども人間発達研究所の
長期追跡研究から

Findings for Children up to Age 41/2 Yeares

目　次

はじめに　　日本子ども学会代表　小林登　……2

日本語版の出版に寄せて　　サラ・フリードマン　……4

第一部

NICHD発達初期の保育と子どもの発達に関する研究
（菅原ますみ・松本聡子訳）

この研究で明らかになった最も重要なこと　……11

NICHD発達初期の保育と子どもの発達に関する研究の概要……13
この研究は何を目的としているか／研究はどのようにおこなわれたか／ “保育(child care)” をどう定義するか／研究で調査された保育と家族の特徴／研究で焦点が当てられた子どもの発達の側面／結果を見るときに留意すべきこと

保育の質について　……20
保育の質 (child care quality) とはなにか／保育に関する規定的特徴／保育に関するプロセス的特徴 ／保育の質に関する規定的特徴とプロセス的特徴は互いにどのように関連しているか？／保育の質はどのように子どもの発達に関連しているか？保育の質と子どもの知的・言語的発達 ／保育の質と子どもの社会性の発達／保育の質と子どもの健康／どのようにして親や養育者は保育の質を評価できるのか？

保育の量について　……28
保育の量 (quantity of child care)とはなにか？／保育の量はどのように子どもの発達に関連するか？／保育の量と子どもの知的・言語発達／保育の量と子どもの社会性の発達保育の量と子どもの健康

保育のタイプについて　……31
保育のタイプ (child care　type) とはなにか？／保育のタイプはどのように子どもの発達に関連するか？／保育のタイプと子どもの認知と言語発達／保育のタイプと子どもの社会性の発達／保育のタイプと子どもの健康

家庭の特徴について　……35
家庭の特徴 (family features) とはなにか？／家庭の特徴はどのように子どもの発達に関連するか？／家庭の特徴と子どもの知的・言語的および社会的発達／家庭の特徴に関するその他の結果

就学期以降の研究について　……40

さらに詳しい情報を入手するためには　……41
1　国立子ども人間発達研究所(NICHD)に関して／ NICHD発達初期の保育と子どもの発達研究プロジェクト(SECCYD)に関して
2　児童家庭養護庁(ACF)に関して

別表Ａ　１．研究に参加した家族　２．研究を行った地域と施設　……42
別表Ｃ　ポジティブな養育のチェックリスト　……45
別表Ｄ　研究の沿革　……48
別表Ｅ　引用文献　……50

《第二部をお読みいただく前に》　菅原ますみ　……50

第二部 座談会

今、日本の『保育の質』を考える
――NICHD研究結果を踏まえて　……65

出席者：汐見稔幸　（東京大学名誉教授・白梅学園大学学長）
　　榊原洋一　（お茶の水女子大学教授・医学博士）
司会：菅原ますみ（お茶の水女子大学大学院教授）

あとがき　……94

【巻末付録】ポジティブな養育のチェックリスト

NICHD
発達初期の保育と子どもの発達に関する研究
4歳半までの研究結果

Findings for Children up to Age 4½ Years

Eunice Kennedy Shriver NICHD
National Institute of Child Health & Human Development

アメリカ合衆国 保健社会福祉省
国立保健研究所　(NIH)
Eunice Kennedy Shriver
国立子ども人間発達研究所 (NICHD)

U.S. DEPARTMENT OF HEALTH AND HUMAN SERVICES
National Institutes of Health
National Institutes of Child Health and Human Development

すべてのご両親へ

子どもを育てるということは、わたくしたちがなすことのうちで最も難しいもののひとつですが、同時に最も重要であり、多くの喜びをもたらしてくれるものでもあります。日常的な子育て一つ一つにも悩みはたくさんあります。その上さらに、子どもにどんな家庭外の保育を受けさせるか、誰に保育を頼むかを決めることもまた、とても難しいものだといえます。

現在、アメリカの多くの家庭にとって家庭外の保育は一般的なものであり、多くの親が乳児期から就学前までに何らかの保育施設に子どもを預けています。アメリカ国立子ども人間発達研究所 (National Institute of Child Health and Human Development: NICHD) では、10年以上前から発達初期での保育体験と子どもの発達との関連を解明する研究に取り組んできました。この研究が目的は、家庭環境や子どもの個性の違い、また保育の特徴が、子どもの発達と健康にどのような関係を持っているかを明らかにすることであり、単なる保育の調査研究にとどまらず、子どもの生活と発達とを描き出すことをめざしています。

このブックレットは、保育施設を全面的または一部なりとも利用している家庭、利用しようかどうか現在考慮中の家庭、まだ利用していない家庭のいずれかを問わず、すべての家庭を対象に書かれており、保育施設の利用や子どもの発達の理解に役立つ情報を提供しています。わたしたちの研究活動は現在も着実に続いており、今後も、保育、家庭、子どもの発達の複雑な関係性について継続的に発表していきたいと考えています。

Director, NICHD

アメリカ国立子ども人間発達研究所　所長
医学博士　デュアン・アレキサンダー

著者注：1 や 45 など単語や文章の右肩にある小さい数字が表しているのは、その情報や提案がどの 研究結果に基づいているのかをあらわすもので、研究発表の論文は別表 E—引用文献のセクションに掲載されています。別表 E にある文献には本書に取り上げられている内容よりもさらに詳しく研究結果が記載されていますが、これらは研究者や専門家の読者を想定してまとめられています。

Major Findings From The Study

この研究で明らかになった最も重要なこと

1990 年代の初めには、アメリカでは多くの子どもが生後 6 ヶ月までに、母親以外による保育を受けるようになりました。今回のこの研究（the NICHD Study of Early Child Care and Youth Development; SECCYD）には、様々な文化的、社会経済的な特徴をもつ 1,000 人を超える子どもたちが参加しましたが、これらの参加者から得られた情報によると、平均的な子どもが人生最初の 4 年半を通して母親以外の人からの保育を受けるのは 1 週間あたり約 27 時間でした。このうち最初の 2 年間はほとんどの保育が親戚などの家や規模の小さい保育施設で行われていて、子どもの年齢が上がると比較的子ども数の多い保育施設に預けられる割合が高くなっていく傾向がみられました。

本研究の結果で最も重要なことといえば、母親による養育でもそれ以外の人による保育でも子どもの発達にはほとんど差がなかった、ということでしょう。ただ単に母親のみによる養育を受けているか、それとも母親以外による保育を受けているかを比べても、これらが子どもに及ぼす影響に差はみられず、母親以外の保育を受けているかどうかということだけでは、子どもの発達について多くを語ることができないことがわかりました。しかし一方で、保育の質や量（時間）、そして保育施設の特徴を詳しく見ていくと、強い関係性とは言えませんが、保育の特徴の違いは子どもの発達にある程度の影響性を持つこともわかりました。以下に主な結果をあげてみましょう：

- 4 歳半までの結果では、質の高い（訳注：保育の質については、〇ページ以降を参照）母親以外の保育を受けている子どもの方が、質の低い保育を受けている子どもよりも、言語と知的発達の面で若干優れた発達を見せていました。また 3 歳までの結果では、質の高い保育を受けた子どもたちの協調性がより高いことがわかりました。

- 保育の量（時間）に関しては、母親以外による保育の合計保育時間が短い子どもにくらべて、より長い子どもの方に問題行動が少し多めにみられました。

- 施設型の保育を受けた子どものほうが、施設型ではない場所で保育を受けている子どもにくらべて言語発達、知的発達ともにより優れていましたが、同時にまた施設型の保育や幼稚園での保育を受けていた子どもの方が、施設型以外の保育を受けていた子どもたちにくらべて、若干問題行動の頻度が高いという結果もみられました。

子どもの発達は、その子が預けられている保育施設の特徴よりも、親や家庭の要因により強く影響を受けることも明らかになりました。親と家族の特徴にのみ関連性がみられて保育施設の特徴とは関連しない子どもの発達の側面がいくつかあることもわかりました。子どもの発達に関連する家庭の要因の例を挙げると、「親の教育レベルが高い」、「家族の収入が高い」、「情緒的に多くのサポートがある」、「家庭が知的に刺激的な環境である」、「母親が精神的に健康である」、などがあり、これらの家庭の特徴は、子どもの「言語発達」、「知的発達」、「社会的行動の発達」、さらには「親とのよい関係」などと関連がありました。家庭や親がどんな養育をしているかは、家庭外保育を受けない子どもたちにとってと同じように、多くの時間を保育施設で過ごす子どもたちのウェル・ビーイングにとっても重要な影響を及ぼすものであることがわかったのです。

NICHD 発達初期の保育と子どもの発達に関する研究の概要

the NICHD Study of Early Child Care and Youth Development; SECCYD

アメリカではこの 30 年間、両親以外の人による保育を受ける子どもの数が増加してきました。このようなタイプの保育には、親戚や家庭内のベビーシッター（ナニー）による保育、施設型の保育所での保育が含まれます。

親以外の人に子どもを預けるというスタイルの子育てを選択することは、決して簡単なことではありません。以下のような疑問がわいてきます：

- 母親以外による保育は子どもにどのような影響を及ぼすのでしょうか？
- 子どもが受けている保育の質がよいものかどうか、どうやって知ることができるのでしょうか？
- どのようなタイプの保育が最適なのでしょうか？
- 定期的に母親のもとを離れて時間を過ごすことは、母子関係やその他の家族との関係に影響するのでしょうか？

子どもの保育については今までにも多くの本が書かれており、世の中には専門家からの助言なども氾濫していますが、信頼することのできる研究にもとづいた情報は多くはありません。専門家の間でさえ意見が割れるようなこともよくあります。

アメリカ保健社会福祉省の国立保健研究所の１つの機関である国立子ども人間発達研究所 (The National Institute of Child Health and Human Development (NICHD)) は、1991 年に、様々なタイプの家庭外保育と、これらの施設を利用する家庭と子どもについて、家庭でのみ子育てをする家庭をも含めて調査する研究を開始しました。発達初期の保育と子どもの発達に関する研究 (Study of Early Child Care and Youth Development (SECCYD)) は、子どもが発達する多様な環境に関して、これまでで最も包括的な研究であり、この大規模な実証研究によって保育と子どもの発達に関する信頼性の高い正確な情報を得ることができました。

この研究の結果から保育と子どもの発達に関する疑問のすべてに答えることはできないとしても、みなさんに子どもと家族に関する数多くの有益な情報を提供することができるでしょう。母親以外の人による保育の影響だけでなく、家庭環境や親の養育（ペアレンティング）が子どもの発達にどう関係するか理解することについても役に立つはずです。

1 この研究は何を目的としているか

この研究の主な目的は、子どもが受ける保育の経験の違いが、子どもの社会的、情緒的、知的、言語的、そして身体的な発達と健康に、どのような影響をおよぼすかを検討することでした。この研究のさらに詳細な目的には以下のものが含まれています。

母親以外による保育の種類にはどのようなタイプがあるか、どのような経緯で子どもは一つのタイプの保育から別のタイプの保育へと移っていくか、子どもが最初に母親以外の保育を受けるのは何歳のときか、保育の質や長さにはどのような幅があるのか（たとえば週何時間、または１日何時間くらい母親以外の保育を受けるか、平均の保育時間は１週間でどのくらいか、どのようなタイプの保育を体験しているのか、保育者たちは子どもとの関わりにどのくらいの時間を費やしているのか）など保育に関する現状を明らかにする。

保育タイプの選択と家族の社会経済的な特徴（訳注：親の収入や学歴、職業など）に関係があるかを調べる。

主として母親の養育を受けた子どもと、母親以外の保育を多く受けた子どもを比較して、両者にどのような違いがあるかを調べる。

家庭外保育の質や週当たりの保育時間数、どのような　タイプの保育施設であるかといった「保育の特徴」が子どもの発達にどのような直接的な影響を及ぼすかについて、これまでに明らかにされている子どもの発達に関する家族の影響を考慮した上で調べていく。

子どもの保育体験と子どもの発達との関係が家族の社会文化的背景によって違うかどうかを検討する（たとえばアフリカ系アメリカ人家庭に育つ子どもと白人家庭に育つ子どもでは保育体験と発達の関係に違いがあるか、また、家族の裕福さや家族が子どものニーズに敏感に反応するかどうかといった、家族の特徴によって保育体験と発達の関係に違いがあるかどうかをみる）。

両親の子どもに対する情緒的なこまやかさや家庭環境の良質さ、両親の教育レベル、精神的な健康度、態度や信念といった「家庭の特徴」が、子どもの発達にどのような影響を及ぼすかを調べ、それが母親以外の保育を受ける子どもと受けない子どもで違うかどうかを考察する。

2 研究はどのようにおこなわれたか

この研究では、保育施設の特徴とそこでの子どもの経験に関する詳しい情報収集に加えて、家族と子ども自身の特徴についても注目して情報を集めました。研究者たちは、得られた幅広い情報をもとに、保育の経験や家庭環境、そして年長になったら学校での経験も含めて、それらが子どもの発達とどのように関連するか分析を続けています。データ収集は、研究に参加している子どもたちが生後１ヶ月時に開始され、発達に沿って縦断的に調査が継続されてきています。情報収集は表１のように４つのフェイズ（研究期間）で行われています。４つのフェイズで参加者数が異なるのは、研究に参加しなかった家族がいたからであり、その理由には、研究に興味を失った、転居したなど様々な原因がありました。

表１　研究のフェイズ（研究期間）と参加者数

期間	子どもの年齢と学年	参加者数 (子どもと家族)
1991-1994	第１期，　１歳から３歳まで	1,364 家族
1995-1999	第２期，　小学１年生まで	1,095 家族
2000-2004	第３期，　小学６年生まで	1,073 家族
2005-2007	第４期，　中学３年生まで	集計中

データ収集は、アメリカ国内の 10 地域で行われました。別表 A（○ページ）に掲載した参加家族に関する詳しい情報からもわかる通り、社会経済的、文化的に多様な家族が研究に参加しました。統計的な意味ではアメリカのすべての階層について網羅しているとはいえませんが、参加者は幅広い社会文化的な背景を持っています。これは健康に生まれた子どもであれば、その子が両親と一緒に住んでいるか、ひとり親の家庭に住んでいるかは問わず、また家庭の経済的状況、親の教育レベル、白人家庭であるか少数民族家族であるかなどは問わずに研究の参加者とされたからです。

生後１ヶ月の時点での参加家族の特徴は以下のようなものでした：

- 40.0％の参加者は貧困または貧困に近い経済状況の中にいた（4½ 歳時点でこの統計は 23.0％で割合が減少していますが、その理由としては、参加家族の経済状態が改善したことと、貧困またはそれに近い状態にあった家族が研究から脱落していったことの両方が考えられる）。
- 参加した子どもの 85.5％の母親には配偶者（パートナー）がいた。
- 10.2 ％の母親は高校を卒業しておらず、21.1 ％の母親は高卒で、33.4 ％は大学または同等の教育を受けており、20.8％は大学を卒業しており、14.5 ％は大学院にいっている。
- 子どもの出生時の母親による回答では、参加した家族の 76.4 ％は非ヒスパニック系白人、12.7％はアフリカ系アメリカ人、6.1 ％はヒスパニック、4.8％は アジア人、太平洋諸島人、アメリカ先住民族などであった。

＊さらに詳しい家族の属性や、データが収集された地域に関する情報については、別表 A（○ページ）を参照してください。

3 “保育 (child care)” をどう定義するか

本研究では、保育 (child care) を「母親以外の人によって定期的に行われる子どものケア」と定義しました。この定義では、不定期、または臨時に行われるベビーシッティングは保育に含まれません。母親以外の人のケアを受けたとしてもそれが週 10 時間以下の場合には、「母親のみによる養育を受けている、と見なしました。

研究が始まった当初は、「どのような形態を保育とみなすか」について研究者間でなかなか同意が得られませんでした。研究者によっては、父親が子どものケアをすることは母親以外による保育と見なされるべきであるとする人もいる一方、母親以外の保育に含まれるべきは両親以外の者によるケアのみが含まれるべきである、とする人もいました。最終的には「父親や親戚などを含めて、母親以外の人によって行われる定期的な子どものケアをこの研究の対象とする」ということで合意が得られ、父親、親戚、その他のすべての大人からのケアを「母親以外による保育」と定義することになったのです。

このブックレットにまとめられているのは、研究フェイズの第１期と第２期の出生から４歳半までの研究結果です。４歳半で一区切りにしたのは、アメリカではほとんどの子どもが５歳で就学し、就学に伴って保育の状況も大きく変わることが考えられるからです。就学後の結果については、データが収集・分析され次第、別のブックレットとしてまとめていく予定です。

4 研究で調査された保育と家族の特徴

研究者たちは、自分たちが調査する対象について「性質」「特性」「変数」「属性」など様々な言葉を使いますが、ここでは一般的な「特徴」という用語を使ってこれらの概念を表現していきます。本研究では親や保育者から受ける以下のようなケアの特徴と子どもの体験との関連についても調査されました。

保育状況の特徴とそこでの体験の特徴[2,3]

（以下は主要なもので、このリストはすべてを網羅しているものではありません）

- はじめて保育施設に預けられたときの年齢
- 保育のタイプ (たとえば、保育園や幼稚園のような施設型、小規模な家庭保育、親戚の家、など)
- １週間に受ける保育の時間
- ひとりの子どもが受ける保育のタイプとタイプの重複数（訳注：いくつの異なるタイプを経験したか）
- それらの保育施設が満たしている専門的に定められたケアの良質さに関する基準数
- 観察によって測定した子どもが受けている保育の質

家族の特徴と子どもの家庭での体験の特徴[4,5]

（このリストも主要なもののみであり、すべてではありません）

- 母親の教育歴、性格や精神的健康度
- 父親の教育歴、性格や精神的健康度
- 経済状態
- 家族の人種的背景
- 家族構成 (たとえば、ひとり親家庭であるかそれとも両親と生活しているか)
- 子どもに対する母親の対応のこまやかさ
- 子どもとの関わりにおける母親の知的な刺激付け (たとえば、母親が子どもに本を読んで聞かせたか、母親が子どもに話させようとしたり、発声させようとしたりするか、子どもが色の名前を呼ぶように働きかけるかなど)
- 親の子育てに関する信念と実践

5 研究で焦点が当てられた子どもの発達の側面

調査で測定された子どもの発達の特徴は以下のとおりです。
(このリストも主要なもののみで、すべてではありません)

知的・言語的発達—子どもの考える力や、刺激に対する反応の発達、自分を取り巻く世界とのかかわり方の発達

＊知的･言語的スキルのなかで重要なものとして、注意、記憶、言語の使用、語彙、言語理解、問題解決、推論、知識獲得の方略が調査された。

＊上記のスキルは読み書きの能力と数や算数の理解の基礎を築くものであり、本研究では読み書きの能力と数に関するスキルについても付加的に調査している。

＊　これらのスキルを 1 つ以上使うことを励ますような働きかけのことを、“知的な刺激付け (cognitively stimulating、たとえば、声を出して文字や数字を読んだり、かたちや物の名前を言ったりして、子どもがこれらのことを習得する手助けしたり、年齢が上の子どもに対しては、言葉の意味を説明して学習を助けたりすること)” と呼ぶ。

このブックレットでは、「知的発達」「知的スキル」「知的能力」という言葉によって就学後の勉学に必要となる広範囲な知的到達目標を表現している。

社会的行動—子ども同士または子どもと大人とのかかわり方、また子どもがどのように自分の行動をコントロールすることができるか

＊　友達、両親、親以外の大人との関係を築くことができ、また維持することが可能となることは、重要な発達課題である。

＊　自分勝手なことばかりいう、大人の言うことを聞かない、乱暴な行動をする、社会的に孤立するなどの行為は、問題行動あるいは否定的な社会性の現われであるとみなした。

＊　社会的に有能な（socially competent）子どもであれば、年齢にふさわしい他者へのふるまいや関係が持てるだろうと予測した。

情緒的発達と母親との関係—子どもの情緒的成長と身についているスキル

＊　研究者たちは、参加した子どもの愛着が安定したものであるか (securely attached)、それとも不安定なものであるか (insecurely attached) を観察した。安定した愛着を達成している子どもは、母親を自分に安心感を与えてくれるものとして使う力があり、また母親を信頼することができる。

＊　愛着のタイプ（訳注：安定型、不安定型）、母親の子どもに対する敏感さ、子どもから母親への働きかけや関係を持とうとする行動を観察することで、子どもの情緒的発達に関するスキルのレベルを評価した。

＊　さらに、子どもと母親がおもちゃを使って遊んでいる場面を観察し、母親の子どもに対する感受性や母子間の関係性について評価をおこなった。

身体的成長と健康—子どもの身体的特徴、全般的な身体的健康

＊　子どもの全般的な健康について親から得られた情報（たとえば、熱を出す頻度、咳など上部呼吸器官の病気の回数、胃腸の不調の頻度など）によって、子どもの健康度が調べられた。

＊　ほぼ毎年、身長体重測定もおこなわれた。

上記以外にも多くの特徴について測定が行われましたが、その詳細は別表 B—研究で調査された発達の特徴（○ページ）を参照してください。ここに掲載することができたのは研究を通して一貫して確認できた重要な結果のまとめでしかなく、一つずつの結果について深くふれることはできませんでした。本書で取り上げられる結果についてさらに詳細なことが知りたい読者は引用文献（○ページ）にある関連論文を読まれることを薦めますが、これらの論文の多くは科学者や研究者を読者に想定して書かれているものが多いので、一般読者にとってはややわかりづらいところもあるかもしれません。

6 結果を見るときに留意すべきこと

因果関係ではなく相互の関連性を明らかにしている、ということ

本研究では、時間の流れとともにどのような保育のパターンが自然に作られていくのかを調べました。そのため、この研究では、子どもをあらかじめ「保育を受ける群」「保育を受けない群」に割り振るようなことはせず、また保育を受け始める年齢や週あたりの保育時間なども決めることはしませんでした。

こうした研究方法から得られる結論では、子どもの保育経験と発達との関連性について言及できるにとどまり、1 週間あたりの保育時間や保育のタイプ、保育の質などの要因が、子どもの健康や知的な発達、社会性の発達にみられる個人差の直接の原因であるかどうかを明らかにすることはできません。別の言い方をすれば、この研究結果から言えるのは、“ある保育の特徴とある発達の特徴との間に関連性があるかどうか、あるとすればどのくらいの強さの相互関連なのか”、ということなのです。ある保育の特徴が原因である発達の結果に至った、ということはできないのです。このブックレットで保育や家族の特徴と子どもの発達との関連性について言及するときには、「A が B を引き起こした」という表現は使わず、代わりに「A と B は関連している」「A と B は相互に関連している」「A があると将来のある時点で B があらわれるようである」などの表現が使われています。

本研究の結果の性質について

ブックレットには、科学的に特筆すべき主要な結果だけがまとめられており、それらはデータに関するさまざまな検証から信頼性や一貫性が確認されたものです。取り上げられている相関関係には弱い相関のもの（つまり統計的には有意だが、関係の強さは弱い）、中程度の相関のもの、また強い相関関係（統計学的に有意であり、かつ関係の強さも強い）のあるものまでいろいろありますが、今回の結果のほとんどは “弱い” から “中程度” の相関でした。しかし、ここで留意しなくてはいけないのは、相関の強さは結果の重要さとイコールではなく、たとえ弱い相関でも重要性が高いこともある、ということです。

たとえば、結果において小さな差異であっても、それが発達を通して存在し続けたり、発達とともに差が大きくなったり小さくなったりするときには、その差異は重要なものであるといえるかもしれません。同様に、保育の経験が子どもの知的能力の高さや問題行動傾向にわずかにでも関係していて、さらにそれが少なくない人数の子どもたちにみられる傾向であるとすれば、保育施設のありかたや学校の運営などに提言されるべきところがでてくることでしょう。保育施設が、知的発達が比較的進んでいる子どもにとっては、知的能力をより伸ばすのに適した場所であるのかもしれないし、子どもに問題行動傾向がわずかにでもより強くみられるとすれば、その施設では先生がクラスをまとめるのに時間がとられ、学習をサポートする時間がその分不足するかもしれないのです。

Child Care Quality

保育の質について

1 保育の質 (child care quality) とはなにか

私たち研究者は、質のよい保育は子どもの発達を促進するだろうと考え、この仮説を確かめるために２つの要素について調査をおこないました。第一の要素は、保育の構造的特徴に関するもので、子どもと保育者の人数の比率とクラスごとの子ども数、担当の保育者が受けた教育のレベルを取り上げました。これらの構造的特徴は、公的機関や州などの規定で定められることが多く（“regulable feature”, 規定的特徴と呼んでいます）、子どもの保育場面における日々の経験の舞台を用意する重要な要因であるといえるでしょう。第二の要素は、子どもの保育施設での実際の日々の経験そのものに関するものです（“process feature”, プロセス的特徴と呼んでいます）。保育場面を注意深く観察することによって、子どもと保育者との関わりや、子ども同士の関わりについて、またおもちゃなど物を使った遊びについて情報を得ました。

保育の質に関わる２つの要素についてもう少し詳しく説明しましょう。

保育に関する規定的特徴 [2]

本研究では以下の３つの規定的特徴を調査しました：

●**大人と子どもの人数比率**　一人の保育者が何人の子どもの保育をしているか？　一般的には、一人の大人がケアをする子どもの人数が少ないほど保育の質はよく、そこでの子どもの発達もよいと考えられる。

●**グループの大きさ**　一つのグループまたはクラスには何人の子どもがいるか？グループの人数が少ないほうが保育の質はよいと考えられる。

●**保育者の教育レベル**—保育者がどの程度の高等教育を受けているか？（高校を卒業しているか、大学をでているか、大学院に行ったか）。保育者の教育歴が高いほど保育の質はよく、子どもの発達もよいと考えられる。

ここにリストアップしたような規定的特徴に関する最低基準については、各州が規定していることが多く、基準を満たしてはじめて保育施設は公的に登録することが認可されます。保育施設の最低基準の内容は州によって大きくばらついており、各州の規定については州政府に直接問い合わせて知ることができます。

規定以上のレベルの保育施設：職業団体によって定められた認定基準

国や州によって決められている規定のほかにも、専門機関によって定められている保育施設に対するさらに厳しい認定基準がいくつかあり、それらは親が子どもをどこに預けるかを決めるときにとても参考になるものといえるでしょう。たとえば、アメリカ幼児教育協会 (National Association for the Education of Young Children (NAEYC)) が定めた基準は、最も歴史があるもののひとつで、センター型の保育施設 (child care center) や家庭保育施設 (family child care home) はこの基準に合致すると「認定」施設として認められることになります。具体的にこの認定基準がどんなものであるかについては学会のインターネットサイトを参照して下さい （http://www.naeyc.org）。

全米ファミリーチャイルド保育協会 (The National Association of Family Child Care NAFCC) も自宅で保育を営んでいる施設の最低基準の認定をおこなっています。これも NAEYC の基準と同様に歴史があるもので、いち早く最低基準を設けた団体の１つです。内容については、NAFCC のサイトで閲覧することができます（http://www.nafcc.org）。 多くの州には最低基準以上の高いレベルを満たしている保育施設を指定する制度があり、そうした施設に対しては、政府から保育援助を受けている子どもを保育した場合、費用の払い戻し率の優遇措置がとられることがよくあります。

小児科医や健康教育に携わっている専門家たちも NAEYC の規定に似た基準を定めていますが、本研究では以下のガイドラインを規定的特徴の基準として用いることにしました（表２参照）：

出生時から３歳まで本研究に参加した子どもたちが預けられていた多くの保育施設では、表２のガイドラインの４つの基準を満たしていませんでした（表３参照）。特に出生時から２歳くらいまでの時期に使われていた施設で基準を満たしていなかったところが多く、その後より年長になってから使われた保育施設ではこの基準を満たしているところが多くみられました[4]。

表２　本研究で用いられた保育基準

アメリカ小児科学会と米国公衆衛生協会によって推奨されている保育ガイドライン **(Professional standards for Child Care Recommended by the American Academy of Pediatrics and the American Public Health Association4)**
＊大人と子どもの人数比率： 6 ヶ月から 1 ½ 歳までの子ども――子ども 3 人に対して保育者 1 人 1 ½ 歳から 2 歳までの子ども―――子ども 4 人に対して保育者 1 人 2 歳から 3 歳までの子ども――――子ども 7 人に対して保育者 1 人
＊グループの大きさ： 6 ヶ月から 1 ½ 歳までの子ども―― 1 グループ 6 人まで 1 ½ 歳から 2 歳までの子ども――― 1 グループ 8 人まで 2 歳から 3 歳までの子ども―――― 1 グループ 14 人まで
＊保育者のトレーニングと教育レベル： 高卒以上で、その後何らかの専門的教育を受けた者。これには大学での児童発達学、幼児教育学およびそれらの関連領域の学位取得者などが含まれる。

なぜ規定的特徴は保育の質にとって重要なのか？

表３の保育ガイドラインの認定基準を満たす保育施設に預けられていた子どもは、基準を満たさない施設に預けられていた子どもよりも、3 歳時点での就学レディネス（就学への準備状態）や言語理解能力においていくらか優れており、また問題行動も少なめでした。

規定的特徴のうちいくつかの最低基準を満たしていればそれでよいということはなく、すべての特徴それぞれが、知的能力と社会性の発達にとって重要なものであることがわかりました。満たしている基準数が多ければ多いほど、子どもの発達はよりよかった、というとてもシンプルな結果となったのです。この結果は、家庭の収入の違いや母親の子どもに対する感受性を考慮して分析しても、揺るがない確かなものでした。[4]

表３　本研究で観察された保育施設のうち、ガイドラインで定められた基準を満たしていたクラスの割合（生後 6ヶ月から 3 歳まで[4,6]）

基準	6ヶ月	1½ 歳	2 歳	3 歳
大人と子どもの人数比率	**36%**	**20%**	**26%**	**56%**
観察されたグループの大きさ	**35%**	**25%**	**28%**	**63%**
保育者のトレーニング	**56%**	**60%**	**65%**	**75%**
保育者の教育レベル	**65%**	**69%**	**77%**	**80%**

保育に関するプロセス的特徴[3,7]

保育に関する規定的特徴は簡便に測ることのできる保育の質の指標だといえますが、実際の保育場面の観察は、そこで行われる日々の対人的な関わりや保育活動について、より詳細な情報を提供してくれます。プロセス的特徴のうち、子どもの発達に一貫して最も深い関わりを持っているのは“ポジティブな養育 (positive caregiving) ”であり、それには保育者の子どもの行動に対する感受性の豊かさや子どもの興味とやる気を励ますような接し方、保育者と子どもとの頻繁な関わりなどが含まれます。

“ポジティブな養育 (positive caregiving)”とは何か？

“ポジティブな養育”は保育者の行動の直接的な観察によって評価される保育の質の指標であり、以下のような要素が含まれています：

- **ポジティブな態度を示す**——保育者はいつも元気で明るく子どもに接しているか？　子どもの手助けを親切にしているか？　子どもにしばしば微笑みかけているか？
- **ポジティブな身体接触をする**——保育者は子どもを抱きしめたり、肩に手をやったり、手をつないだりしているか？　子どもをなぐさめているか？
- **子どもの発声や発話に応答する**——子どもが言ったことを復唱したり、子どもが言っていることや言おうとしていることに応答したり、質問に答えたりしているか？
- **子どもに質問する**——保育者は”yes”や”no”で簡単に答えられるような質問をすることで、子どもが話をしたりコミュニケーションすることを促しているか、また、家族やおもちゃなどについて質問することで、子どもが話をすることを促しているか？
- **そのほかの子どもへの話しかけ**
  - **ほめる**——「がんばったね！」「よくできたね！」などの表現で子どもの行動をほめているか？
  - **学びの手助けをする**——声を出して文字や数字を読んだり、かたちや物の名前を復唱させたりして、子どもがこれらのことを習得する手助けをしているか。年齢が上の子どもに対しては、言葉の意味を説明して学習を助けているか？
  - **お話を語ったり、歌をうたったりする**——お話を語ってあげたり、ものやできごとについて説明したり、歌をうたってあげたりしているか？
- **発達を励ます**——子どもが立ったり、歩いたりする手助けをしているか？たとえば保育者が乳児のケアをしているとしたら、保育者は乳児をうつぶせにしてしばらく寝かせることで背中や首の筋肉が強くなりハイハイができるように手助けしているか？また、年齢が上の子どもに対しては、パズルをする手伝いをしたり、箱を積み上げる遊びをしたり、自分でチャックが閉められるように励ましているか？
- **社会的な行動の奨励**——保育者は子どもが微笑むこと、笑うこと、また他の子どもと遊ぶことを促しているか？保育者は子どもが他の子どもをおもちゃや道具を一緒に使ったりすることを勧めているか？保育者自身よい行動をお手本として示しているか？
- **読む力を伸ばす**——保育者は子どもに本を読んであげているか？保育者は子どもにページをめくらせたり触らせたりしているか？また、年齢が上の子どもに対しては、絵や言葉を指差したりしているか？
- **否定的な関わりを回避する**——保育者は否定的な関わり（訳注：どなったり無視したり、体罰をあたえるなど）を避けて、子どもとポジティブな態度で接することに努めているか？何らかのトラブルがあったときでも、子どもにポジティブな態度で接することができるように努力をしているか？子どもとのコミュニケーションを大切にし、無視することがないように努めているか？

こうしたポジティブな養育が多ければ多いほど保育の質はより高いものであることが、研究の結果として示されました3　。たとえば、大人と子どもの人数比率と子どもの発達との関連は保育者の行動によって説明できるという結果がでていますが、保育者がより少ない人数の子どものケアをするときには、ポジティブな養育はより多く出現し、そのことが子どものよりよい発達につながっていくのだといえます。同じことが保育者の教育レベルの高さについてもあてはまり、教育歴が長く専門教育の程度が高い保育者ほどポジティブな養育が多く出現し、そのことがよりよい子どもの発達につながっていくのだと考えられます。以上のことから、“ポジティブな養育”は、保育の質の最も重要な指標である、ということが明らかになりました。

子どもたちはどの程度ポジティブな養育を受けているのか？

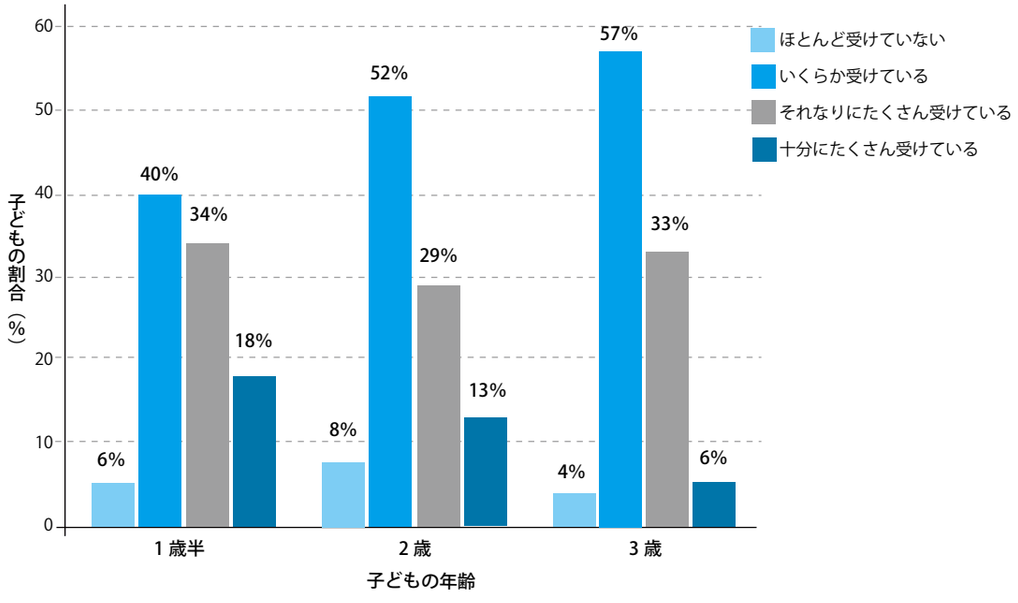
研究に参加した子どもたちのうち、「ポジティブな養育を十分にたくさん」受けた子どもは多くはいませんでした[7] (図 1 参照)。図 1 を見てわかるとおり、「ポジティブな養育を十分にたくさん」受けた子どもの割合は加齢とともに減少しており、1 歳半から 2 歳、3 歳と最初の 3 年間で 18%、13%、6% となっています。同様に「ポジティブな養育をほとんど受けなかった」とされる子どもの割合もまた低く、最初の 3 年間で 6%、8%、4% でした。

「ポジティブな養育をそれなりにたくさん」受けた子どもは最初の 3 年間を通じて約 30%で推移しており、本研究に参加した子どもたちが受けた保育はすばらしいものとはいえないまでも、ある程度質の高いものであったといえます[7]。

今回の参加者とアメリカ合衆国全体の統計とを比較して、1 歳半から 3 歳までの子どもが受けている保育の質は以下のように見積もることができるでしょう[7]：

- 保育施設でポジティブな養育を十分にたくさん受けている子どもは全米で 9%
- 保育施設でポジティブな養育をそれなりにたくさん受けている子どもは全米で 30%
- 保育施設でポジティブな養育をいくらか受けている子どもは全米で 53%
- 保育施設でポジティブな養育をほとんど受けていない子どもは全米で 8%

図1　SECCYDに参加した子どもたちはどの程度ポジティブな養育を受けているか？



このデータから全米平均でも大多数の子どもはそれなりに、またはいくらかの質の良い保育を受けており、一方とても質の良い保育施設と非常に質の良くない施設はともに 10%以下であると推測されます。

2 保育の質に関する規定的特徴とプロセス的特徴は互いにどのように関連しているか？

公的機関や各州で定められている規定的特徴（大人と子どもの人数比率や保育者の教育歴など）は、そこで行われる保育の質の間接的な指標とはなりえますが、保育場面の注意深い観察によって測定されるプロセス的特徴は、子どもがどのような保育の経験をしているかについてより直接的な情報を提供してくれます。

下の図のように、規定的特徴によって特徴づけられる保育の構造は、そこで子どもが経験する保育のプロセス的特徴に影響し、プロセス的特徴は子どもの行動と発達に影響を及ぼします。

公的機関や各州、またそれ以外の団体が定められている保育の基準を満たしている数が多いほど、そこで行われている養育はポジティブなものになり、よりポジティブな養育、すなわちより高い保育の質は、そこに預けられている子どもたちの行動と発達により良い影響を及ぼす、ということになるのです。

つまり、比較的子ども数が少なく保育者の多い施設で、教育歴が高くよくトレーニングされた保育者が子どものケアをしている場合、そこに預けられている幼い子どもたちは保育者に暖かく接してもらうことができ、また保育者も子どもに十分に目を向けることができて、遊びも知的なものになる傾向があります。そしてこうした保育を受けた子どもたちは、よりよく発達していくことになります。

それとは逆に、子どもの数が多く保育者の数が少ない施設で、教育やトレーニングがあまり十分ではない保育者にケアされている状況では、保育の質は低くなりがちで、子どもの発達の伸びにも制限がもたらされることになります。次のセクションでは保育の質と子どもの発達についてさらに掘り下げてみていくことにしましょう。

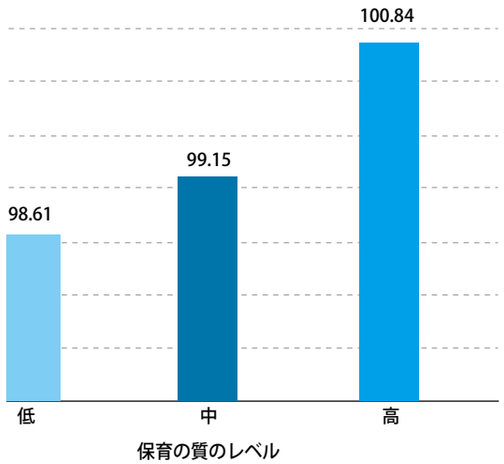
3 保育の質はどのように子どもの発達に関連しているか？

私たちは、保育のプロセス的特徴（保育の質）と子どものさまざまな行動や発達との関連について、それぞれの子どもの家族が持っている特徴（家庭の文化的・人種的背景や、親の教育歴など）と保育施設の特徴との関連も考慮しながら検討を進めました。

保育の質と子どもの知的・言語的発達

- 3 歳になるまでの間、より質の高い保育を受け続けた子どもは、そうでない子どもに比べ、この期間を通して知的能力と言語発達がいくぶんよかった[2,9]。
- 3 歳までの知的能力と言語能力の発達に、もっとも強く関連していた保育の質は、保育者の言

図2　SECCYDに参加した子どもたちが受けた保育の質と就学前の学力
（図注：参加した子どもたちの平均得点は 100 点で、標準偏差は 15 だった）



葉の使い方に関するものだった。保育者が子どもに質問したり、子どもの発言や発声に積極的に反応したり、その他の子どもに対する言葉かけなどは、よりよい知的・言語的発達に若干の関連を示した[9]。

- 3歳までのより質の高い保育は、4歳半のときの言語能力や数字の理解といったテストの点に表される就学準備の良好さと関連した。

以上のように、子どもの知的・言語的発達と保育の質とに関連があることが示されましたが、この関連は強いものとはいえず、家庭や両親に関する要因のほうが保育の質よりも子どもの発達と深いかかわりを持っていました。保育の質の高低による知発達と言語発達の差よりも家族の特徴の差による違いのほうが大きいことがわかったのです。図2をみると、保育の質の高低で平均値にそれほど大きな得点の差がないことがわかるでしょう[10]。

4 どのようにして親や養育者は保育の質を評価できるのか？

これまでに述べてきたとおり保育の質にはさまざまな側面がありますが[8,20,21]、その中でもっとも簡単に評価できるのは、保育施設の構造的な特徴、つまり規定的特徴についてです（大人と子どもの人数比率、クラスの人数規模、保育者がどのような教育やトレーニングを受けてきたかなど）。保育施設がどのような機関によって認可されているかは、保育施設に問い合わせれば知ることができます。先に述べた機関（NAEYC や NAFCC など）のうちのどこかから認可されているならば、それは質の高い保育のよい指標となります。保育施設の設置基準に責任を持っている地方自治体によって認可や認証、指定などと受けているかどうかについても尋ねてみましょう。行政から認められている施設であれば、そこでの最低限の基準は超えていることがわかります。どのような基準なのかは、あなたの住んでいる地方自治体の行政府に問い合わせれば情報を得ることができます。

保育の質に関するプロセス的特徴を評価することは簡単ではありませんが、NICHD ではご両親が評価できるようなツールを提供しています。「ポジティブな養育のチェックリスト（The Positive Caregiving Checklist）」（別表 C-The NICHD SECCYD ポジティブな養育のチェックリスト）は本研究で使われたチェックリストによく似たものです。このリストを使うことで、現在お子さんが通っている保育施設や、お子さんを通わせようかと考えている施設での保育の質を評価することが可能となります。リストと使用法については、別表 C-The NICHD SECCYD 質のよい保育チェックリストを参照してください。

保育の質はリスクを抱えた家庭の子どもたちの助けとなることができるだろうか？

社会経済的に恵まれていない子どもたちが、質のよい早期教育プログラムを受けることによって発達面でかなりいい結果が得られることは、早期介入の効果に関する先行研究で示されてきました[3]。この結果を踏まえて、今回の研究でも、家族の収入が低い家庭の子どもたち、母親のみまたは父親のみの家庭に育つ子どもたち、また少数民族の子どもたちが、そうではない子どもたちに比べて、質のよい保育からより多くの恩恵を得るかどうかを調査しました。その結果、家庭がどんな社会経済的特徴を持っていたとしても、それらは保育の質と子どもの発達との関係に影響を及ぼすことはなく、両者の関係はどの家庭の子どもにとってもおおむね同じことが言えることがわかりました[22,23]。

しかし、結果をよくみてみると、1歳半の時点で発達に遅れが見られた子どもたちには、そうでない子どもに比べて質のよい保育が特に効果的であることがわかりました[24]。この結果から、保育の質と関係があるのは子ども自身の個人差であり、質のよい保育が特に有効なのは、家庭の社会経済的要因に恵まれていない子どもたちや少数民族の子どもたちではなく、発達レベルや機能に問題を持つ子どもたちであることがわかりました。ただし、これらの結果の解釈について気をつけなくてはいけないことが一つあります。それはこの研究の対象として集められた家族の特徴に関わることです。まず、本研究には18歳以下の母親は含まれていません。また極めて貧しい家庭の子どもたちの人数も多くありませんでした。これに加えて4歳未満では、経済的に恵まれない子どもたちは質の高い保育を受ける割合が低いということもわかっているので、本研究の結果からは、極めて貧しい家庭環境で育つ子どもたちの発達が保育の質によって影響を受ける程度は、より恵まれた環境の子どもたちと同等のものかどうか、正確には言及できないといえるでしょう。

保育の質に関して言えること

乳児期、トドラー期（よちよち歩きの時期）、就学前期を通して、保育の質は知的発達と中程度の関連を持っていました。保育の質はまた、乳児期とトドラー期において子どもの社会性の発達とも中程度の関連がありました。 より高い質の保育を受ける子どもたちは、より低い質の保育を受ける子どもたちと比較して良好な発達的結果を示すことがわかりました。

Quantity of Child Care

保育の量について

1 保育の量 (quantity of child care) とはなにか？

保育の量とは、子どもが保育施設で過ごす1週あたりの平均時間数のことです。

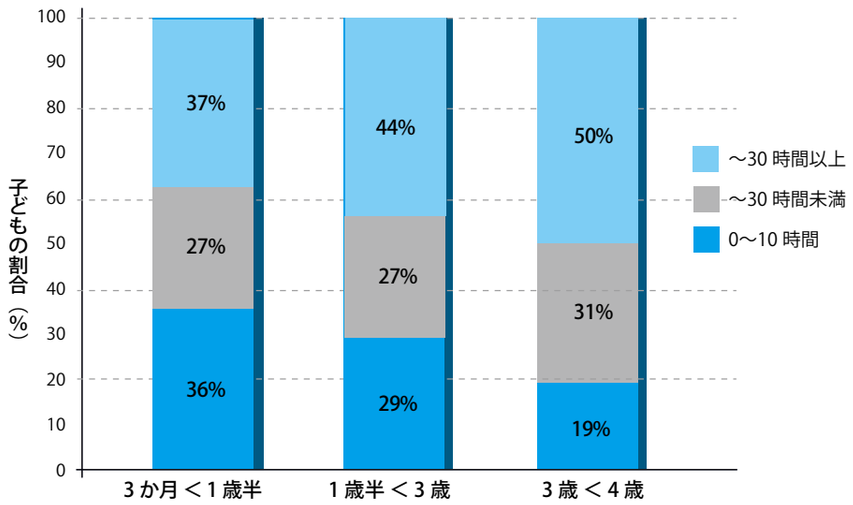
本研究に参加した子どもたちは、生後6ヶ月から4歳半までの間、週平均27時間を何らかの保育施設で過ごしていました。

保育時間数と年齢には関連があり、より年長の子どもは年下の子どもに比べて長い時間を保育施設で過ごしていました。図３のグラフ（研究に参加した子どもたちの保育時間）を見てもわかるとおり、３ヶ月から１歳半のグループでは週30時間以上保育されていた子どもの割合が37%であったのに対し、3歳から4歳半までのグループではこの割合が50%になっています。同時に、週の保育時間が10時間に満たない子どもの割合は乳幼児期から就学前期にかけて減少する傾向にありました。結果として図３のように、週10時間から30時間保育されている子どもの割合は就学するまであまり大きな変化はありませんでした。

研究に参加した子どもたちの保育時間のグラフ（図３）からわかること

- 生後3ヶ月から１歳半までの間で、すでに27%の子どもが週10時間以上の保育を受けており、37%の子どもは週30時間以上の保育を受けていた
- １歳半から3歳にかけて、44%の子どもが週30時間以上の保育を受けていた
- 3歳から4歳半では半数の子どもが30時間以上の保育を受けていた

図3　SECCYDに参加した子どもたちの保育時間



2 保育の量はどのように子どもの発達に関連するか？

保育の量が子どもの発達にどのように影響するかを理解するために、子どもの家族の要因（家庭の文化的・人種的背景や両親の教育レベルなど）と保育施設で受けている保育の質の要因とを考慮したうえで、子どもが生まれたときから保育施設で過ごした時間の総量について検討しました。4つの時点（１歳半、2歳、3歳、4歳半）で、本研究に参加した子どもたちの発達を年齢別の発達到達度と比較した結果、以下のことがわかりました。

保育の量と子どもの知的・言語発達

就学前のすべての時点で、子どもの知的・言語的スキルや就学前準備と保育の時間との間には関連がみられませんでした[9]。

保育の量と子どもの社会性の発達

- 子どもとの関わりにおいて子どもに敏感に応答できなかった母親の子どもが、週10時間以上の保育を受けると、母親に対する愛着が不安定になる可能性が高まる[12,13]。
- 保育者や母親、学校教師から得られた評価によると、より長い時間を保育施設で過ごす子どもは2歳半、4歳と幼稚園（訳注：　5歳時点のこと。アメリカでは通常、３～4歳はナーサリー・スクールに通い、5歳は小学校と同じ校舎内にあることが多い幼稚園に進学する）の時点で、いくぶん協調性と従順さが低くなり、またいくぶんより攻撃的であることがわかった。３歳のときにはこうした関連はみられなかった[14,25]
- 保育施設の保育者による評価では、4歳半になるまでに週30時間以上保育施設で過ごす子どもは4歳と幼稚園（訳注：5歳時点のこと）の時点でより問題行動が多くなる傾向がみられたが、この傾向は母親による評価では認められなかった[25,27,28]
- 子どもが保育施設で過ごす時間の長さは、特別な注意を必要とするような顕著なレベルでの問題行動や精神病理とは関係なかった[27,28]
- 保育の質と同様に、保育の量よりも家族要因の方が、子どもの社会的行動と社会性の発達をより強力に予測する要因であることが明らかになった[4,5,27,28]

子どもの保育時間が長いほど、子どもとの関わりであらわれる母親の感受性がより低いレベルになるということが、3歳まで一貫して示されました。この傾向は4歳半および就学後の調査でも同じようにみられましたが、それは白人家庭に限定されたものでした。アフリカ系とヒスパニック系の家庭では逆の傾向がみられ、4歳になるまでの間に保育施設で過ごした時間が長いほど、母親の子どもに対する感受性はより高いレベルとなり、この傾向は4歳半および幼稚園のときにも継続して見られました。つまり3歳以降になると、保育施設で過ごす時間と母親の養育スタイルとの関係は、白人家庭と非白人家庭では異なるものであることがわかりました[13]。

保育の量と子どもの健康

保育施設に預けられていることによって子どもは伝染性の病気（かぜなどの流感など）にかかる可能性が多いと思われがちですが、本研究の結果では、以下の2つの疾患を除けば病気への罹患率は

週あたりの保育の量と関係がないことがわかりました。

- １歳になるまでの間に、より長い時間を保育施設で過ごす子どもは、耳の炎症を起こす危険性が８％高い[2,18,23]
- １歳になるまでの間に、より長い時間を保育施設で過ごす子どもは、下痢や腸からくるインフルエンザなどに罹る危険性が４％高い[18,19,25]

保育の量に関して言えること

乳児期から4歳半までの間に保育施設で過ごす時間数と就学前の知的能力の間には関係がありませんでした。しかし、保育施設で過ごす時間がより長い子どもは、問題行動がいくぶん多くみられる傾向があり、またさほど深刻ではない炎症性の病気に罹るリスクは少し高くなっていました。また、保育施設で過ごす時間数は、母親と子どもとの関係性にもある程度関連することがわかりました。

著者注：障害を持つ子どもと保育[35]

ダウン症候群や脆弱Ｘ症候群、自閉症、またその他の障害を持つ子どもたちは障害のない子どもたちとは違ったニーズを持っています。障害のある子どもたちが受けている保育の質はどうなのかについて、２名の本プロジェクトの研究者が独立して研究を行ない、その結果を本研究と比較しましたが、障害のある子どもとこの研究に参加した健常の子どもを比較したところ、障害を持った子どもの母親は健常な子どもを持った母親に比べて、子どもが１歳になるまでに仕事に復帰する率が低いことがわかりました。このことから、障害を持った子どもは保育施設に預けられる年齢が比較的遅くなることもわかりました。また、特に発達障害と診断されている子どもたちは、比較的短い時間保育施設で過ごしていました。

最も特筆すべきことは、障害のある子どもとない子どもの間で受けている保育の質に全般的には差がなかったことです。

Child Care Type

保育のタイプについて

1 保育のタイプ (child care type) とはなにか？

本研究に参加した子どもたちは、以下のようなさまざまなタイプの“保育”（訳注：母親以外の人による養育のこと）を経験していました。

- 自宅での保育（In-home care）—子どもの父親、祖父母またはその他の大人が子どもの自宅でケアをしている
- 在宅保育 (Child care homes)—保育者が自分の自宅で子どものケアをしている
- センター型保育 (Child care centers）—子どもたちが従来の保育所（デイケアセンター）のような自宅外の場所でケアされている

図４のように、ほとんどの子どもたちは２つ以上の保育の設定状況（養育者の種類や場所、上記のようなタイプなど）を経験しており、１歳までに平均2.57の異なる保育の設定状況を経験していました[25]。

図５のように、母親以外の大人にケアをしてもらっている子どもの率は年齢とともにあがることがわかりました。これ以外の傾向でわかったことは、以下のとおりです[4,7,25]，。

- 母親による養育のみを受けている子どもの割合は、生後６ヶ月で36%、３歳で21%、４歳半で11%であった
- 在宅保育を受けている子どもの割合は3歳までほぼ同じ割合で変化がなかったが（生後６ヶ月で22%、３歳で20%）、４歳半では12%まで減少した
- センター型の保育を受けている子どもの数は、不定期に利用する子どもたちを含めて生後6ヶ月の９％から３歳で31%、４歳半では54%ま

図４　研究に参加した子どもたちにおける保育のタイプ数の平均

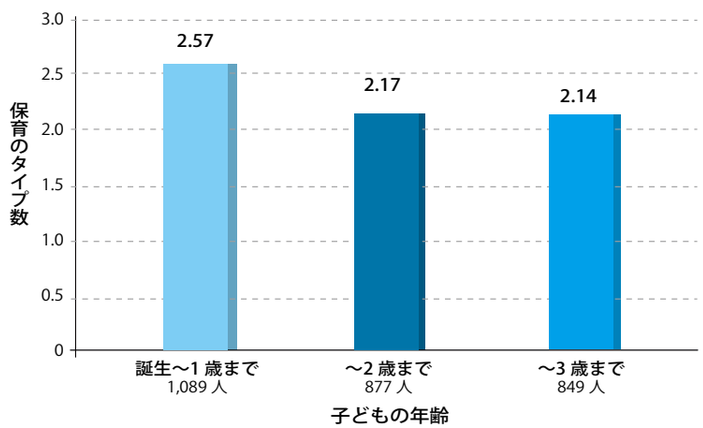
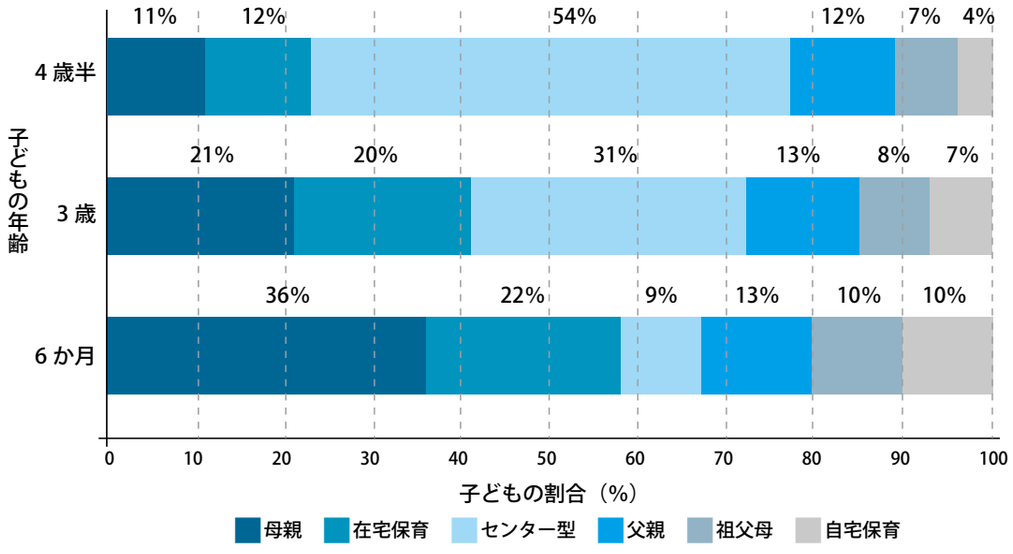


図５　研究に参加した子どもたちの保育のタイプ



で増加した

●父親による保育は13%程度で一貫して変わらなかった。

●子どもの自宅での祖父母による保育は10%から８%、４歳半の7%へと減少した

●祖父母、父親以外による子どもの自宅での保育は、10%から７%、４歳半の4%へと減少した

2 保育のタイプはどのように子どもの発達に関連するか？

保育のタイプが子どもの発達にどのように影響するかを理解するために、子どもの家族の要因（家庭の文化的・人種的背景や両親の教育レベルなど）と保育施設で受けている保育の質や量に関する要因とを考慮したうえで検討をおこないました。保育のタイプ別にそれぞれ望ましい面と望ましくはない面の両面があることがわかりました。

保育のタイプと子どもの知的・言語発達

６ヶ月以上の子どもでは、センター型の保育施設に預けられている経験がより多い子どもの方が、知的・言語的発達において、３歳まで一貫していくぶんよい発達を遂げていることがわかりました。また、４歳半時点での就学前の学習能力（文字を書くことや数を数えることなど）の面でも優れていました[8,10,29]。（それぞれの保育タイプで保育の質が同等である場合の結果です）

保育のタイプと子どもの社会性の発達

保育のタイプと社会性の発達との関連性は、子どもが何歳であるかによって違う結果がでました。たとえば以下のような結果です。

●センター型保育のような集団保育をより多く経験している子どもは、ほかの保育タイプに属している子どもより、２歳時点で保育者に対してより協調的であり、また２歳および３歳時点で問題行動もより少なく（保育者の評価による）、３歳時点での母子の関わりでもより良い発達的な結果が得られた[7,9,29]

●しかし、４歳半の時点では、センター型の保育施設での経験がより多い子どもの方が不服従や攻撃的な問題行動がいくぶん多い傾向にあることが保育者の評価からわかった[9,29]

保育のタイプと子どもの健康[18,19]

●センター型の保育や在宅保育を受けている子どもは、自宅で保育されている子どもに比べてとくに１歳と２歳の時点で耳の感染症や上気道の感染症（風邪）にかかりやすかった

●センター型の保育を受けている子どもは、その他の保育を受けている子どもよりも胃腸系の病気（下痢や腸からくるインフルエンザなど）に若干かかりやすかった

●１歳になるまでの一年間に親族の誰かに保育をされていた子どもは、胃腸系の病気（下痢や腸からくるインフルエンザなど）になりにくい傾向がみられたが、3歳では罹患傾向は若干上がっていた

さらに、子どもがどのくらい呼吸器系や胃腸系の病気にかかりやすいかは、保育を受けている子どもの1グループあたりの人数にも関係がありました。

●６人以上の子どもが保育を受けている在宅保育やセンター型保育では、上気道の感染症（風邪）や耳の感染症、胃腸系の病気にかかる子どもの率が高かった

●大規模なグループ保育を受けている子どものほうが、在宅保育や少人数のグループ保育の子どもに比べて上気道の感染症（風邪）にかかりやすかった

●大規模なグループ保育を受けている子どものほうが、在宅保育や少人数のグループ保育の子どもに比べて胃腸系の病気（下痢や腸からくるインフルエンザなど）にかかりやすかった

●２歳になるまでの２年間に大規模なグループ保育を受けていたことで、３歳から４歳半の間に病気にかかりにくくなるということはなかったが、2歳から3歳までの一年間に大規模なグループ保育を受けていた子どもは、３歳から４歳半の間に上気道の感染症（風邪）や胃腸系の病気にかかる可能性は低かった

保育のタイプに関して言えること

センター型の保育には良い発達的な効果とそうでない効果の両面が関連していました。センター型の保育は、4歳半まで一貫して子どものよりよい知発達と関連があり、また3歳までのより良好な社会的行動と関連していました。その一方で、センター型の保育や大規模なグループ保育は、就学前後の時期での問題行動がより多くなる傾向とも関連していることがわかりました。また、こういった保育タイプは3歳までの上気道の感染症（風邪）や耳の感染症、胃腸系の病気へのかかりやすさとも関連していました。

Family Features

家庭の特徴について

本研究の科学的な研究としての大きな長所の一つは、家庭の特徴を考慮しながら保育と子どもの発達との関連性を明らかにすることができる点にあります。家庭要因の影響を考慮せずに保育と子どもの発達について言及したとしたら、わたしたちが導く結論はゆがんだものになってしまう可能性があります。子どもの発達と保育との関連性を検討するにあたっては、家庭要因を無視して結論を出すことはできないといえるでしょう。

このブックレットでこれまでに見てきたように、全般に、家庭の特徴や家庭での子どもの経験の特徴は、保育のどの側面よりも子どもの発達に対してより強力で一貫した影響力を持っていることが明らかになりました。

1 家庭の特徴 (family features) とはなにか？

別表 Aや前述したような社会経済的な特徴の多様性のほかにも、本研究に参加した家庭は、家庭環境や子育てに対する態度、母親の抑うつなどの家族の心理的な適応状態、子どもの情緒的あるいは知的なニーズに対する感受性にも家庭による違いがみられます。私たちは、こうした家庭の特徴をさまざまな方法によって測定をおこないました。たとえば、以下のような方法です。

- 家庭環境の質に関しては、各２時間程度の数回にわたる家庭訪問によって測定をおこなった。家庭でのインタビューと観察から、家庭の子どもに対する知的な刺激づけの程度（持っている本の数や、図書館にいっているかどうか、など）と、母親と子どもの関わりにおける情緒的な暖かさが測定された
- 両親の子育てに関する態度と母親の心理的適応はアンケートによって測定された
- 母親の感受性については、研究者によって設定された場面で、子どもが興味を持ちそうなおもちゃなどで母子が一緒に遊んでいるところを観察して測定をおこなった （設定場面やおもちゃは全サンプルに共通のものを用いた）

方法に関する詳細は別表 Bを参照して下さい。

2 家庭の特徴はどのように子どもの発達に関連するか？

家庭の特徴が子どもの発達にどのように関連するかを理解するために、本研究では家庭の社会経済的な特徴（収入や人種的背景など）を考慮しつつ、保育の側面（保育の質と量）に沿って検討をおこなっていきました。

家庭の特徴と子どもの知的・言語的および社会的発達

子どもの知的発達と社会性の発達に最も重要で一貫した影響力を持っていたのは、母子の関わりの良質さでした。母子の関わりを観察しているときに、母親が子どもに対して感受性豊かで応答性に富み、また子どもをよく見ていて、知的に刺激のある働きかけをすることが多いほど、子どもの発達はよりよいものである傾向にありました。こうした母親の特徴は、子どもの母親に対する愛着の安定のよさ、言語能力、就学前の文字や数に関する学習能力の高さ、社会的行動についても同様にポジティブな関連性を持っていることがわかりました[4,9,12,13,14,15,30]。

母親の好ましい子どもへの接し方は、教育歴の高さや家庭の経済的状況の良さ、抑うつ度の低さ、そしてよりポジティブな性格などの母親要因と関連していました。

これらの要因は、母親の感受性を媒介して子どもの発達の良好さと間接的な関連性を持っている一方で、子どもの発達そのものと直接的に関連していることもわかりました。親の教育レベルの高さや家庭の経済状況の良さ、母親の抑うつ度の低さや性格のポジティブさは、子どものよりよい発達を直接的に予測する要因でもありました。

このほかに子どもの知的・社会的発達の重要で一貫した予測要因だったのが、家庭環境の質 (the quality of family environment) と呼ばれる要因でした。規則正しい生活が組みたてられて、本や教育的玩具があり、家庭内外の活動（図書館に行ったり、文化的な催し物に参加したりする）に積極的に参加できる家庭の子どもは、社会性においても知的な面でもより良い発達を示していました[5,6,12,23]。

家庭の特徴と子どもの発達との関連性は、長時間（週30時間以上）の保育を受けている子どもでも、おもに母親のみの養育を受けている子どもでも、変わりはありませんでした[32]。たとえば、以下のとおりでした。

- ３歳になるまでの３年間をおもに母親にのみの養育を受けた子どもと保育を受けてきた子どもでは、知的能力において差がなかったが、わずかに言語的能力において違いがみられた
- おもに母親のみの養育を受けた子どもと保育を受けた子どもとでは、1歳、2歳、3歳時点での知的能力と言語能力に差はみられなかった9 。
- 最近の分析結果から、2歳、3歳、4歳半の時点で定期的に保育施設に預けられているかどうかは子どもの知的、言語的、社会性の発達とほとんど何の関連もないこと が明らかになった

家庭の特徴に関するその他の結果

家庭の特徴は、保育とは関連性が見いだされなかった子どもの発達の側面さえも含み、子どもの知的、言語的、社会性の発達のすべての側面と関連する重要な要因であることがあきらかになりました。

家族の特徴と子どもの発達との関係の強さは中程度のものでしたが、保育と子どもの発達との関

係に比べて2倍から3倍も強いものでした。図6と図7は、家庭の特徴のなかで、親の養育の質と家庭収入をとりあげ、２つの子どもの発達の側面（問題行動と就学前の学習能力）がこの２つの家庭の特徴と保育の量とそれぞれどのくらいの強さで関連しているかを示しています。

家庭の特徴が保育の特徴より子どもの発達と強く一貫した関連性を示すのは、生物学的な遺伝要因と子どもの家庭環境のなかでの経験が組み合わさっていることに由来しているかもしれません。しかし、残念ながら本研究はその２つを識別できるような研究デザインではないため、このことに関しては研究結果をもとに言及することはできません。

家庭の特徴に関していえること

多くの家庭の特徴が保育の特徴（質や量）よりも強力に、そして一貫して４歳半までの（幼稚園期になってもなお）子どもの発達と関連していることがわかりました。子どもの知的・言語的発達と社会性の発達を予測する家庭の特徴は、両親の教育レベル、収入、ひとり親家庭かどうか、母親の精神的な健康さや子どもに対する応答の敏感さ、対人関係的および知的な家庭環境の良質さなどでした。

図６　子育ての質と保育の量(訳注：保育時間)との関連性の比較
：問題行動と就学前学力について

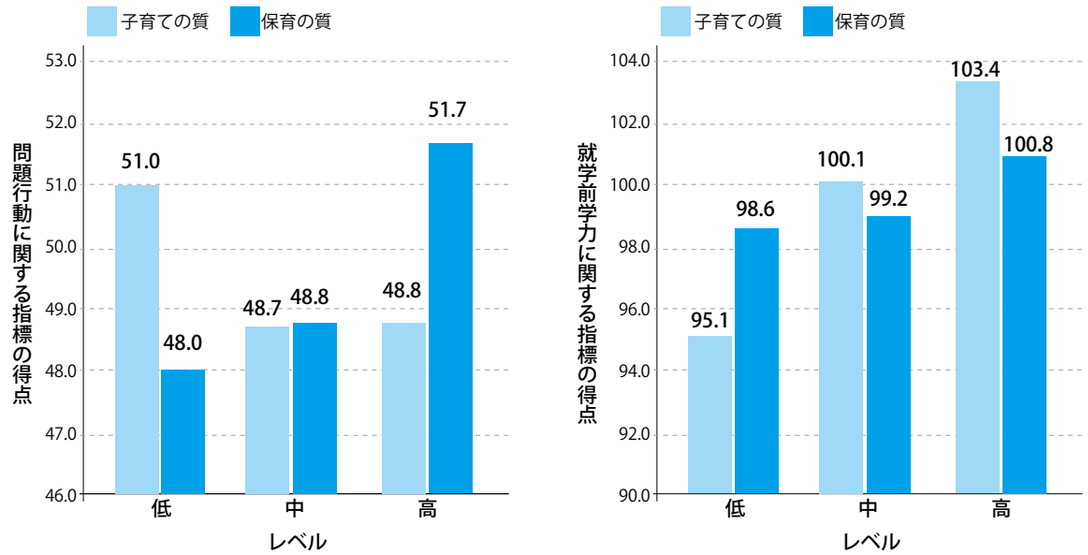
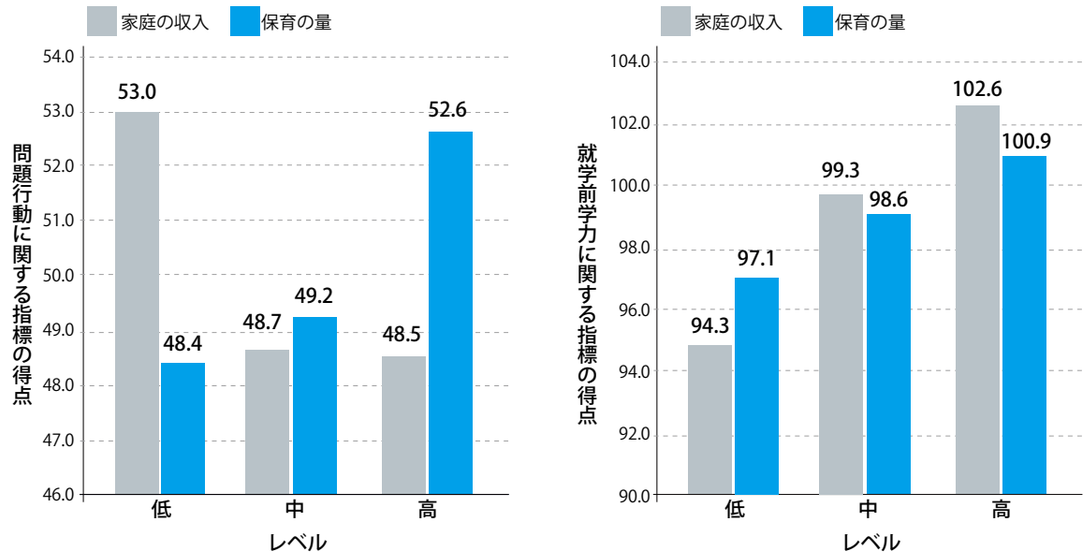


図７　家庭の収入と保育の量（訳注：保育時間）との関連性の比較
：問題行動と就学前学力について



Beyond Infancy, Early Childhood, and Preschool

就学期以降の研究について

このブックレットでは子どもが４歳半になるまでの研究の結果についてまとめてきましたが、参加者が中学生になった現在も追跡調査が続いており、子どもたちの家庭と学校での生活を含めた発達に関する貴重なデータが収集されてきています。1991年に生まれた子どもたちは2005年に14歳になり、ほぼ全員が中学２年生になりました。今のところ本研究は少なくとも子どもたちが中学３年生になるまで継続されることになっています。

就学後の時期の研究では、家庭や保育の特徴と子どもの発達との関連が児童期や思春期、青年期にいたっても続くものなのかどうか、といった基本的なテーマに答えるためのデータ収集がなされています。たとえば、幼稚園や就学後の学校の特徴と子どもの発達との関連や、母親や学校による豊かな知的環境づくりと子どもの学校での達成がどう関連するか、については既に分析が終えられています。そのほかにも以下のようなテーマについて分析がなされています。

- 登校前と放課後の保育と子どもの発達との関係[33]
- 児童期における保育の量と子どもの社会情緒的発達との関係[27]
- 児童期における保育の質と子どもの学力および社会的発達との関係[34]
- 児童期における保育のタイプと子どもの学力および社会的発達との関係[34]

NICHDによっておこなわれているこの研究は、現在まで、10年間にわたってアメリカに住む家族とその子どもたちの生活について多くのことを明らかにしてきました。これからの思春期での研究の継続を通じて、保育や学校、放課後のプログラムや、家族や家庭環境をめぐる意思決定に関する重要な資料を提供し続けることになると思われますし、こうしたさまざまな環境すべての良質さが子どもの知的な発達や社会情緒的な発達にどう貢献するのかを明らかにしていけるものと考えています。

Where can I go for more Information

さらに詳しい情報を入手するためには

国立子ども人間発達研究所(NICHD)に関して

ペアレンティング（子育て）や子どもの成長について、あるいは保育施設・学校と子どもの発達との関係に関するさらに詳しい情報はNICHD から入手することができます。NICHDでは、子ども、親、家族、そして一般社会の人々の健康に関する研究を行ったり、こうした課題を扱う研究をサポートしています。保育についてや、保育が子どもの成長や発達にどう影響するかというテーマもNICHDで行われている研究のひとつです。

NICHDは 、すべての人間が望まれて健康に生まれてくること、母親が妊娠・出産の過程で健康を害するような体験をしないですむこと、生まれてきたすべての子どもたちが健康的で豊かな生活ができること、またすべての人間が最善の治療やリハビリテーションを通して、身体的にも精神的にも健康で、自主性をもち、生産的に暮らすことを保証することをめざして活動しています。

NICHDの連絡先は以下のとおりです。

NICHD インフォメーションセンターの連絡先

電話: 1-800-370-2943
ファックス: (301) 984-1473
Eメイル:
NICHDInformationResourceCenter@mail.nih.gov
住所: P.O. Box 3006, Rockville, MD 20847
インターネットアドレス: **http://www.nichd.nih.gov**

NICHD発達初期の保育と子どもの発達研究プロジェクト(SECCYD)に関して

本研究に関するさらに詳しい内容については、研究のインターネットウェブサイトにアクセスして入手することができます（http://secc.rti.org）。このウェブサイトは研究者向けに作られているものですが、以下の情報を入手することができます。

- ◆本研究で使われた調査票などの測定ツールについて
- ◆データの収集時期
- ◆研究に関する全般的な情報
- ◆一般公開されているデータベースとそれらにアクセスするための手順
- ◆参加している研究者への連絡方法
- ◆本研究の結果にもとづいて書かれた投稿論文の一覧表
- ◆本研究に関するすべての著作の一覧表

また、本研究のみのために開設されているものではありませんが、NICHDはインターネットウェブサイトを持っていて、以下のアドレスでアクセスすることができます：
http://www.nichd.nih.gov/od/secc/index.htm

2005年４月には、本研究の結果に関する論文をひとつにまとめた本 “ Child Care and Child Development —SECCYD研究の結果 ” (457 ページ; ISBN 1-59385-138-3; NICHD Early Child Care Research Network編) も出版され、ギルフォードプレスのインターネットウェブサイトから購入することができます（**http://www.guilford.com/**）。

児童家庭養護庁(ACF)に関して

保育と子育てに関する情報は、アメリカ国民の社会経済的な状態に関する福祉を担当しているアメリカ保健社会福祉省の児童家庭擁護庁（Administration for Children and Families ACF）からも入手することができます。児童家庭養護庁の中でも保育局（Child Care Bureau）では、保育施設の保育の質や保育費用の問題、そして家庭にとっての利用しやすさを向上させることを目的としています。保育局では、その職務の一環として連邦政府の保育に関わる予算を州政府や地方自治体に対して配分し、低賃金層の親が仕事に就いたり教育を受けている間に子どもを保育施設に預けられるように手助けをしています。

児童家庭養護庁（ACF）の連絡先は

ACF Child Care Bureau
電話: (202) 690-6782
ファックス: (202) 690-5600
住所: Switzer Building, Room 2046, 330 C Street, SW, Washington, DC 20447
インターネットアドレス: **http://www.acf.hhs.gov/programs/ccb/index.htm**